

2歳児における特色保育と運動能力への影響

発表者：幼保連携型認定こども園 西伊丹幼稚園

清水 美紀

前田 紹子

川野 夏実

久保 奈美

1. はじめに

当園は、幼保連携型認定こども園であり、0歳から5歳までの子どもが在籍している。ここ数年では、2歳から入園し年少クラスに進級する子どもが増え、3歳から新入園児として年少クラスに入る園児数を上回っている。2歳から入園し進級した子どもの方が3歳への保育連携がスムーズであることから、2歳児保育の取り組みを充実することでより良い保育ができるのではないかと考え、昨年度より、今までは3歳からしか行っていなかった特色保育を2歳においても行った。しかし、その効果については未だ確証がないため、今回、以下のような保育計画をもとに2歳児の特色保育と発達に関する検証を行った。

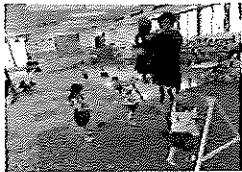
2. 研究目的

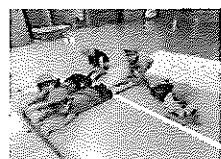
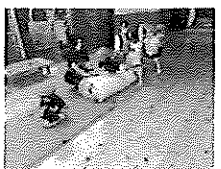
当園では、体育遊び・英語遊び・音楽指導・ダンスなどいろいろな特色のある保育を取り入れているが、その中でも昨年度（2023年度後期）より、特色保育とし体育遊びを2歳児から始めることにし、運動能力・運動神経の発達を促す身体面での成長と、運動を通して感じられる非認知能力（喜び、悔しさ、楽しさ、粘り強さ、諦めない気持ち、気持ちのコントロール）の向上を促す精神面での成長を目的として行っている。乳児対象の体育遊びということで安全を考慮し、専門の体育講師2名と相談しながら指導を進めた。

3. 2歳児クラスでの体育遊びの実施記録（2024年度）

【1学期】

	子どもの姿	講師や保育者の援助	
4月 ●体育遊び ・体操 ♪ぼくた・ま・ご ・しっぽとり ・サーキット （マット・トンネル・平均マット）	・初めての体育遊び、男性講師に戸惑ったり、人見知りしたりする。 ・しっぽとりではルールを理解は難しいがしっぽを付けた講師を追いかけることを楽しむ。	『ねらい』講師に慣れ、楽しく身体を動かす。 ・保育者は子どもたちの傍に付き、安心して参加できるような言葉掛けをする。 ・講師はタッチ等の触れ合いを多く取り入	

		れ、関係作りを慎重に行う。	
5月 ●体育遊び ・体操 ♪ぼくた・ま・ご ・サーキット (マット・鉄棒・平均ブロック・トンネル・ロープ)	・少しずつ講師に慣れ始め、自らタッチをする子どもが増えてくる。 ・♪たまごの体操で笑顔が見られるようになってくる。 ・初めは緊張して涙を浮かべる子どもも、サーキットが始まると参加できるようになってくる。	『ねらい』サーキットを通して、色々な体操器具を楽しむ。 ・保育者は事前に体育遊びが始まることを伝え、気持ちの切り替えができるように促す。 ・毎回同じ体操曲を繰り返し、覚えて楽しめるようにする。 ・講師は初めての器具を毎月取り入れ、気持ちを高めることができるよう工夫する。	
6月 ●体育遊び ・体操 ♪ぼくた・ま・ご ・サーキット (マット・鉄棒・平均ブロック・トンネル・ロープ)	・体力がつき始め、動きが活発になってくる。 ・低月齢、高月齢にやや差はあるが、高這い・転がる・跳ぶができるようになってきた。	『ねらい』遊びを通して順番に並んだり、他児の動きを真似たりする。 ・動きが活発になってきた為、器具の周りに講師や保育者が必ず付き、安全に配慮する。 ・講師は細めに声を掛け、できた喜びを味わうことができるようにする。	 
7月 ●体育遊び ・体操 ♪ぼくた・ま・ご ・ボール遊び ・サーキット (マット・フープ・平均マット・トンネル)	・ルールのある遊びに少しずつ興味を持ち始める。 ・サーキットでは並んで待てるようになってきた。 ・講師に自ら声を掛けたり、抱き付いたりする姿がみられるようになった。	『ねらい』ルールのある遊びに気付き、考えて取り組む楽しさを味わう。 ・講師は体育遊びが始まる前の自由遊びに参加し、スキンシップを取る時間を作るようにする。 ・ルールのあるゲーム遊びでは、実際に見せ	 

		ながら伝え方を工夫し、理解を深めることができるようにする。	
8月 ●体育遊び ・体操 ♪ジャングルグルグル ・簡単なゲーム遊び ・サーキット (マット・鉄棒・平均ブロック・トンネル・ロープ)	・体育遊びに楽しさを感じようになり、笑顔が増え、又積極的に参加する姿が見られるようになった。 ・体操曲が新しくなり、講師の真似をしながら、楽しんでいる。4月の時のような戸惑いは見られていない。 ・初めてホール(広い場所)で高月齢・低月齢が一緒に実施したが、伸び伸びと参加できていた。	『ねらい』新しい取り組みに自ら挑戦しようとする。 ・いつもより広い場所での実施で、声掛け・職員の配置等、事前に話し合い工夫するようにする。 ・ゲーム遊びでは講師の声掛けを保育者が復唱したり、戸惑っている子どもたちには職員が付いて参加したりと、楽しめるようにする。	 

◎1学期の体育遊びはサーキット遊びを中心とした粗大遊びや真似っこ動作を中心に実施した。

まずは①運動を楽しむこと②講師に慣れることに重き、子どもたちの様子を見ながら講師と実施内容を相談している。

【2学期】

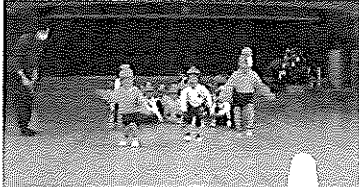
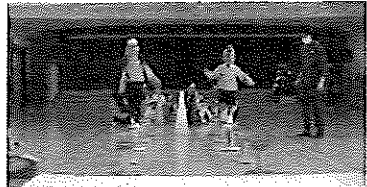
9月 ●体育遊び ・体操♪ジャングルグルグル ・しっぽとり ・サーキット (マット・フープ・平均台・ジャンピングマット)	・体力がつき始め、少し長く走れるようになってきている。 ・ジャンピングマットでのジャンプを好む子どもたちが多くなってきた。	『ねらい』ルールに気付きながら遊びを楽しむ。 ・講師は“しっぽとり”等の遊びで子どもたちが走る機会を作り、持久力や瞬発力が高まり、又ストレス発散にもなるようにする。	 
10月 ●体育遊び ・体操♪ジャングルグルグル ・サーキット (マット・鉄棒・平均台)	・初めて見る器具にも動じず、自ら進んで取り組むことができるようになり、動きも活発になってきている。	『ねらい』やや難しい動きにも楽しんで取り組もうとする。 ・講師は色々な身体の動かし方ができるようなプログラムを考え、	

台・トンネル・ロープ)	・講師を好み、傍にくついたり、動きを真似たりする姿が見られる。	運動の楽しさを伝えるようにする。 ・初めての器具には保育士も傍に付き、安心できるようにする。	
-------------	---------------------------------	---	--

◎2学期の体育遊びは体力がつき、身体のバランス感覚も整ってきているため、走る・跳ぶの体重移動を中心に進め、自発的に身体を動かしていけるように考えている。また微細運動も取り入れている。

4. 検証

2024年、年少クラス（ばら組）に在籍する子どもにおいて、2歳児より進級した子ども（進級児）、2024年に3歳児から入園した子ども（新入園児）、さらに2024年より課外の体操教室にも入会した子ども（体操経験あり）の3グループに分けて、3種類の運動能力テスト（10m走、連続ジャンプ、平均台）を行い、それぞれにおいてかかった時間を測定し、それらの違いのデータを検証した。ちなみに体操経験ありの子どもは、2023年10月より2024年3月までの半年間、基本的に週1回のペースで、約20回の体育遊びを行った。また、得られた結果については、3グループに分けたものに加え、男女別の結果についても検証した。

10m 走	・連続ジャンプ	・平均台
		

測定日：2024年11月21日

測定場所：西伊丹学園 ホール

・10m 走

スタート地点から10m先にゴール地点を設定した。スタート地点から笛の合図でスタートし、ゴール地点までにかかった時間をストップウォッチで計測した。

・連続ジャンプ

スタート地点からゴール地点までは4.5mに設定。50cmごとにテープを9ヶ所貼り、それを連続してジャンプで飛び越えることとした。スタート地点から笛の合図でスタートし、ゴール地点までにかかった時間をストップウォッチで計測した。

・平均台

長さ3.8m、幅14cm、高さ32cmの平均台を準備した。平均台に乗り、平均台の端のスタート地点から笛の合図でスタートし、平均台の端のゴール地点で地上に降りるまでにかかった時間をストップウォッチで計測した。

統計解析

得られたデータ（かかった時間）において、スミルノフ・グラブス検定を行い、外れ値を除外した。

外れ値を除外したデータを用いて、箱ひげ図、ドットプロットを作成した。性別（男児、女児）間について、ウィルコクソンの符号順位検定を行った。グループ（新入児、進級児、体操経験有り）間について、チューキー・クレーマー法による多重比較検定を行った。これらは、R、Rstudio、Excel等のソフトウェアを用いて行った。

男女間で運動能力に差はあるか？

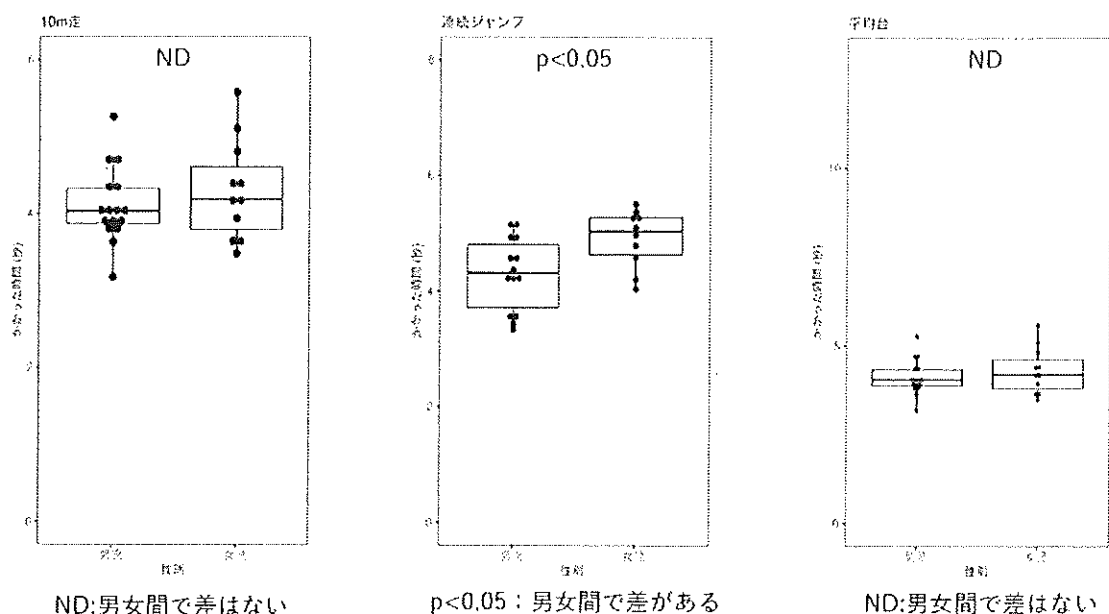


図 XX 男女別による運動能力テストの結果 箱ひげ図とドットプロットで記載。

男女間での運動能力において、10m走と、平均台では差は見られなかった。

・連続ジャンプにおいてのみ、男子の方が女子よりかかった時間が短い傾向があった。

グループ間で運動能力に差はあるか？

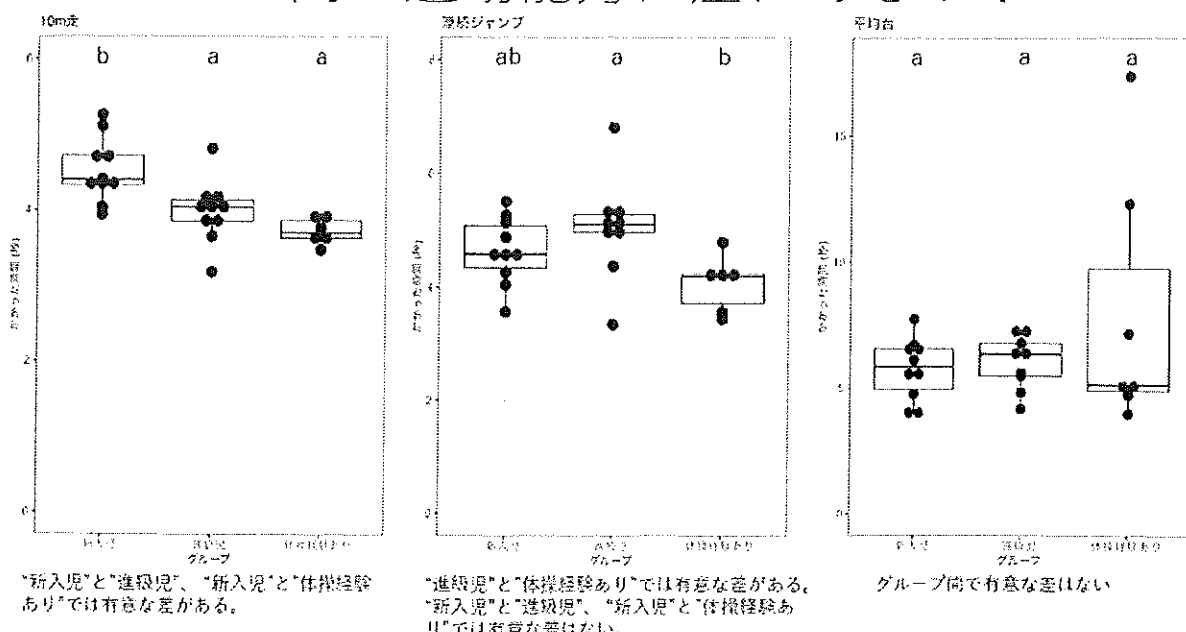


図 XX グループ別による運動能力テストの結果 箱ひげ図とドットプロットで記載。

- ・10m走において、“新入児”と“進級児”では、進級児のほうがかかった時間が短い傾向があった。
- ・“新入児”と“体操経験あり”では“体操経験あり”の方がかかった時間が短い傾向があった。
- ・連続ジャンプにおいて、“進級児”と“体操経験あり”では“体操経験あり”のほうがかかった時間が短い傾向があった。
- ・“新入児”と“進級児”、“新入児”と“体操経験あり”では差はみられなかった。
- ・平均台においては、3つのグループ間で差はみられなかった。

6. まとめ

2歳児の特色保育（体育遊び）の取り組みについて検証した結果、進級児や体操経験ありの子どもにおいて、運動能力が高い傾向がみられた。ただ個人差が大きい結果も含まれるため、より多くの子どもにおいて運動能力テストを実施することで、グループ間で差があるか検証できると考えられる。また継続的にこれらの運動能力テストを実施することによって、入園年度における違いや各子どもの成長具合の変化についても検証できると考えられる。昨年度の課外活動としての「体育遊び」の取り組みは6ヶ月であったが、今年度からは1年間通して行っており、実施回数も増加するため、その効果の有無がより明確になる可能性がある。さらに、年中、年長と、それぞれのグループ別にデータを取ることで、その差が開く、もしくは縮まるなどの変化が観察できるかもしれない。もう一つのねらいでもある「非認知能力」の違いについての検証は、今回できていないが、今後、それらを評価する手法を活用することで、精神面の成長についても調べるようにしたい。加えて、これらの結果を利用することで、より良い特色保育に取り組んでいきたい。